

爾靈の心、白玉の地から引揚げて

—私の記憶より—

東京都 山本 慧 一

一 出生から旅順まで

昭和六（一九三一）年八月上旬、私は滋賀県大津市石山鳥居川町（現鳥居川町）に生まれました。近江八景の一つ「瀬田の唐橋」の近くでした。当時、鳥居川町には、東洋レーヨン（現東レ）石山工場と日本電気（現NEC）栗津工場との二つの工場がほぼ同時に進出してきて、町そのものが大変な活況を呈していました。恐らく、琵琶湖の豊かな水を求めての進出であったと考えます。

工場の進出に伴って、様々な地方から多くの職工さんや女工さんたちがやってきました。これらの人たちが家庭的な安らぎを求めて、休日ごとに私の家などに遊びに来ました。ちょうどそのころには、私も三、四

歳となり、これらの人たちの故郷にいる弟さんたちを思い起こさせるのでしょうか、私を非常にかわいがってくれました。こうした人たちの姿や笑顔などが、今でも私の脳裏に強く焼き付いております。昭和初期の新産業勃興期における、一つの世相であったと思っております。

私の父は、一言でいえば哲学青年でした。大津は京都の隣町といってもいいほど近かったので、父はよく京都山科にある西田天香園主の一燈園、谷口雅春氏主宰の生長の家京都支部、京都大学文学部哲学科の学生さんたちが主催する、哲学研究会などに出席しておりました。また賀川豊彦のキリスト教社会運動にも共感を示し、ときには大阪、神戸などにも行って社会福祉運動もしていたようです。

私たちが日本に引き揚げて来てから、まったく見も知らぬ人々たちから、「あのとき、あなたのお父様に助けていただき、そのお陰で今日の私たちがあります」などと言われて驚いたことがありました。生前の父の姿の一端を垣間見るようでした。

こうした影響を受けたのでしょうか、私も近所の友人たちと一緒にあって、当時としては大津市内でも珍しい鳥居川町に一つしかないキリスト教系幼稚園に通うことになり、その幼稚園を卒業して小学校に入学しました。このことが、満州から引き揚げてから非常に役に立ち、旧制中学校に入学したときもすぐに多くの仲間ができて、転校時などによく見られる「いじめ」や不良生徒による悪い誘いなどにも出会うことなく、楽しい充実した中、高校時代を送ることができました。

昭和十三年三月中旬、父が突然大連に行くことになりました。子供の私にとってはよく分かりませんでした。後日、父母などの話から私の母の母、つまり母方の祖母が手紙で「もし生活が苦しいのなら、大連に來なさい。後は何とかなるでしょう」という便りがあって、それで父の母、つまり父方の祖母と父母が相談し合って「大連行き」を決めたそうです。昭和四年に起こった世界大恐慌による生活の苦しさ、祖母や父母をして「大連行き」を決意させたのではないかと思っております。「父が先に行き、大連での生活環境を整

えてから親子を呼ぶ」ということになり、私は小学校一年生の一学期を内地で終えてから、夏休みに母と共に大連に行くことになりました。

昭和十三年四月、私は滋賀県大津市晴嵐小学校一年智組に入学しました。そのとき、この学校の校庭に咲いていた桜の花が満開で非常に美しく、その桜の花の美しさが、やがては祖国に対する強い憧れへと転化していったと思われます。終戦後、祖国日本へ何が何でも帰り、再び故郷の小学校のあの美しい桜の花を見たいという気持ちを強く持つようになりました。この一年智組の同級生とは、今でもお付き合いがあり、「一度結ばれた友情の絆は、生涯にわたって変わらない」とことを実感して、「友情永遠、友好不変」という言葉が私の胸の奥深くに刻み込まれました。

昭和十三年七月下旬、母と私は大連に向かいました。当時、神戸の三の宮駅から神戸港までは歩いて十分ほどで、非常に近かったように思いました。乗船した船は、確か大阪商船（株）の「うすりい丸」で、二泊三日ぐらいの船旅であったと記憶しています。瀬戸内海

の島々の緑の美しさ、海の色 of 青さ、飛魚やイルカの群れなどが強く印象に残り、これらの思い出もまた祖国への強い憧れとなりました。

先に大連に行っておりました父は、満州電業株式会社（満州における電力供給会社で、以下満州電業）大連支店に勤務しておりました。私は、大連の春日小学校で一年生の二期を、向陽小学校で三期を終えました。成績はクラスの中ぐらいでした。それで父にひどく叱られたことを覚えております。当時の時代風潮であったのかもしれませんが、あるいは父個人の考え方であったのかもしれませんが、父に強く叱られたことが非常に恐ろしくて、三期は一生懸命に勉強したことを覚えています。

昭和十四年四月、父は満州電業旅順出張所（多分、出張所であったと思います）に転勤しました。それと共に、私たちも旅順の旧市街に転居し、私は旅順第一尋常小学校二年生に転入学しました。旅順生活の始まりでした。旅順には旧市街と新市街とがあり、旧市街には、主として日露戦争の直後かあるいはそれに近い

時期に移住して来た、主に商業関係の人たちが多く住み、新市街には、官吏や教育に関係のある比較的新しい人たちが多く住んでいて、旧市街と新市街とは街の雰囲気が多々違ふという不思議な街でした。

それから約六年七カ月の間、私は旅順で過ごすことになりましたが、私は私の人生の中で最も重要な時期を、旅順で過したと言っても過言ではありません。終戦後、ソ連軍による「すべての日本人は昭和二十年十月末日までに（十月三日までにと）いう説もありますが、ソ連軍占領下の旅順では、命令系統が支離滅裂となり、各町、各地区によって命令の内容が異なっており、私の町内では確か十月末日までに、となっていたように記憶しております）、旅順を退去すべし」という強制退去命令によって、大連に移るまで旅順に住んでおりました。

二 終戦時までの旅順の生活

太平洋戦争中の旅順は、他の地域に比べると相当に平穏であったように思います。勿論、新聞、ラジオ等による戦況の報道や日本本土の状況、日々厳しくなっ

ていく日常生活や配給生活などによって、戦争が次第に厳しい局面にあることは、肌で感じ取っておりました。しかし教育と軍港（要塞）、さらには日露戦争の戦跡の維持などに統治の力点が置かれておりました旅順では、日本本土などに比べて、まだまだはるかに街全体がゆったりとしていて、厳しい戦争の状況や恐ろしさなどは、ほとんど認識されていなかったように思います。こうした旅順の街の雰囲気の中で、私が特に覚えておりますことを二、三記して、当時の記録の一部に留めたいと思います。

(一) 父の転勤

昭和十四年四月、父は当時新京（今の長春）にありました満州電業本社に栄転しました。母や私との話合いの結果、単身赴任ということになりました。私が小学校四年生のときでした。それから父は、錦州支店、新京本社、北安支店と転勤し、昭和二十四年四月上旬付の「四十五歳までの在満日本人男性は、全員現地召集」の命令により、父は北安北部にある孫呉の部隊に召集され、そこで終戦を迎えました。父、四十五歳の

ときでした。

忘れもしない同年十一月三日（当時の明治節、現在の文化の日）に、父は単身、大連に帰って来て、私たちとの再会を果たしました。その経緯につきましては、「三、終戦後の旅順、大連、引揚げ」の章で詳しく述べることにします。

(二) 北安旅行

昭和十八年三月下旬、私が小学五年生のときの春休みに、私は母と共に父の任地である北安（ハルピンの北約三百キロメートルの所にあり、ソ連との国境の町、黒河とハルピンとを結ぶ鉄道と、チチハルと北安を結ぶ鉄道とが分岐する交通の要衝地）まで、大連、奉天（現瀋陽）、新京（現長春）、ハルピン経由で旅行しました。やがて小学校を終える私のために、父が用意してくれた私への大きなプレゼントでした。私にとりましては、生涯忘れることのできないほど大きな影響を与えてくれました旅行でした。特に新京以北で経験したことは、すべて初めてのことであり、驚きと興奮の連続でした。地平線まで何一つ見えない広大な原野、

そこから昇ったり沈んだりする太陽、その大きさと燃えるような赤さに圧倒されました。旅順でも美しい日の出や夕日がよく見られましたが、それとは比較にならないほど雄大な光景でした。

ハルピンから北安の間では、無人の荒野のあちらこちらで幾つもの野火が燃え盛り、大空を焦がしているのを目撃しました。風による枯葉などの摩擦により、枯草が自然発火するのだと教えられました。

後年、昭和二十年八月八日、ソ連の対日宣戦布告によりソ連軍の満州侵攻が始まると、北滿に散在していた日本人開拓団の人々が、この広大な北滿の原野を方も分からずにさ迷い歩き、逃げまどい、匪賊や馬賊、ソ連軍などに襲撃されて、自決したり、殺されたり、あるいは孤児となったりしたのかと思うと、中国残留孤児の記事、情報などをただ見聞きするだけで、私はすぐにこの旅行のときの光景が思い出され、涙が自然にあふれてくるのでした。

ハルピンにしましては、駅頭の「故伊藤公遭難地点 明治四十二（一九〇九）年十月二十六日」と記さ

れたプレートや胸像、キタイスカヤ通り、松花江、太陽島、松花江にかかる長い鉄橋、中央寺院、チューリン洋行、忠霊塔、志士之碑などが印象に残っております。特に驚きましたことは、私がハルピンに行きました昭和十八年三月でさえも、ハルピンではチョコレートが食べられたということでした。どのような経路を経て入ってきたのかは知りませんが、忘れることのできない美味しい味でした。自分が育っている旅順、大連以外にも、別の世界があることを初めて自覚させられた旅行でした。

（三） 母の教え

旅順中学一年になっていた昭和十九年秋になりますと、戦況も一段と悪化し、我が家の前の岩山に防空壕が掘られることになりました。中国人の労働者四、五人がこの仕事に携わり、正午に一回発破がかけられて、その後周囲の空気が落ちて着くまでが食事と休憩の時間でした。その食事と休憩の時間に、母は中国人の人たちにお茶を出しておりました。それが当時の隣組で問題となり、隣組の責任者たちが「中国人にお茶を出す

とはなにごとですか。即刻、止めて頂きたい。これは隣組の意向です」と申し出てこられました。そのとき、母は毅然として「中国の人も日本の人も同じ人間でありませんか、皆様も訪ねて来られた方には必ずといっていいほどお茶を出されますでしょう。ましてや、中国の人たちが私たち日本人の命を守るために、防空壕を掘っておられます。お昼の食事時にせめてお茶だけでも出すのが、人間として当然の行為ではありませんか」と反論しました。そうしますと隣組の人たちも返事ができず、「尤も。黙認する」と言って引き上げて行きました。この経緯を不安げに眺めていた中国の人たちの顔には安どの色が浮かび、私もほっと胸をなで下ろしました。しかし同時に、一言も言わずただおろおろと母を見つめていた私の態度が情けなく、恥ずかしい思いでいっぱいになりました。

それ以来、昭和二十年七月末ごろ中国の人たちが来なくなる日まで、母はお昼時には必ずといっていいほど、これらの人たちにお茶を出しておりました。その間、中国の人たちは「家であつたので持って来ました」

などと言っては、野菜や卵や鶏肉などを持って来ましたが、母は決して受け取ろうとはしませんでした。反対に、「このようなことを期待して、お茶を出しているのではありません。絶対に持つて来ないで下さい」と、きつく叱つておりました。ただ「明日から私たちは来なくなりません。今日が最後ですから、是非とも受け取つて下さい」と言われて、一籠の卵が差し出されたとき、初めて「お世話になりました。ありがとうございます」と礼を言つて受け取りました。中国の人たちも、ただ頭を深々と下げて黙つて帰つて行きました。

それから彼らとは二度と会うことはありませんでしたが、その日から一週間後に、ソ連の対日宣戦布告があり、旅順、大連はもとよりのこと、満州全土が戦場と化しました。

母が私が大学三年のとき、五十歳の若さで他界しましたが、このときの母の毅然とした態度、潔癖さ、「中国の人も日本の人も同じ人間ではありませんか」といった重い言葉など、母が日常生活の中で私に示してくれた態度、姿勢、言葉など、これらを私は母の無言の

教えとして受け止め、終生守つていこうと決意しております。

三 終戦後の旅順、大連、そして引揚げ

(一) 終戦後の旅順

昭和二十年八月十五日、天皇による終戦の詔勅が放送された後も、ソ連軍は南下を続け、八月二十二日深夜、旅順もソ連軍によつて占領されました。大連と同時期であつたと言われています。占領は、まず旅順駅と旅順電報電話局がほぼ同時に占拠され、電話線が切られ、外部との連絡がまったく取れなくなりました。この日以降、旅順は強制退去させられる日まで、完全に陸の孤島となりました。

八月二十三日の早朝、近所の商店主から「電話がまったく通じない。どうも様子がおかしい。何かあつたのではないか」という情報が隣組の連絡網を通じてありました。様子を知るべく、急いで近くの交差点に出てみましたところ、交差点には土嚢が二個所ほど五、六段に積み上げられて、機関銃が据え付けられ、手に通称マンドリンといわれる自動小銃を持ったソ連兵が

五、六人警戒に当たっていました。ソ連軍による旅順占領を知った瞬間でした。

その日のうちに、旅順駅付近や電報電話局付近、あるいはその他の場所でのソ連兵による発砲、暴行、略奪その他があつたという情報が流れ、各家庭、各隣組などによる自衛策がそれぞれ講じられました。特に婦女子は髪を短くし、顔に墨などを塗って、男に見られるようにしました。戦勝国である中国人の女性も、そのようにしました。旧市街と新市街との間の往来もできなくなり、旅順は完全にゴースト・タウン化してしまいました。

終戦のとき、私は旅順中学の二年生になっていましたが、昭和二十年四月になると、一年生と二年生だけが学校に残り、三年生は旅順の北西約二十キロメートルばかりの所にある三潤堡海軍飛行場建設のために学徒動員され、四年生は大連市甘井子地区の工業地帯に学徒動員されていました。授業は全くといっていいほど無く、学校の運動場に大きな貯水槽を作ったり畑を作ったり、塹壕となるような凹地を作ったりする作業

と、軍事教練ばかりが行われていました。

八月十五日正午、天皇による終戦の詔勅が放送されると、これまでの作業の中止が命じられ、教頭による事情説明が行われて、直ちに帰宅という措置が取られました。

翌十六日、学校に登校しますと、三澗堡に学徒動員されていた三年生が帰校して登校しており、翌十七日には、大連の工業地帯に学徒動員されていました四年生が帰校して、一説によりますと、その日かあるいはその翌日の十八日かに校長以下、当時学校に残っていた教職員および生徒諸君による旅順中学校の閉校式が行われたとのことでした。残念ながら、私にはこのときの記憶があまりなく、後述する旅順中学校解散式の方のことをよく覚えていません。

八月二十日と二十一日にかけて、旧市街在住の旅順中学生を中心にして、白玉山納骨所に祀られている日露戦争戦死者の遺骨を、麓の西本願寺まで運ぶように学校から連絡があり、それを行いました。このとき日本軍の軍用トラックが使われ、日本軍兵士も約十人ほ

どが加わって、いろいろと指示を出していました。私には、これが日本軍兵士を見た最後になりました。

満州および日本が租借権を有していた関東州で、寄宿舎のある中学校は旅順中学だけで、寄宿舎に入っている生徒は「舎生」と称されていましたが、満州の奥地から学びに来ている「舎生」諸君が相当数おりました。

八月十五日、終戦になりますと、彼ら舎生のうち、両親が関東州に在住する者は直ちに両親の許に帰るよう指示され、その日かその翌日には旅順駅を出発し一升と当座必要とされる若干の金銭が与えられて、最終のグループは八月二十日に旅順駅を出発したそうです。

二十日に旅順駅を出発した私の同級生で、親友でもあり舎生でもあった中国籍のA君は、ソ満国境の街、満州里に近いハイラルにある両親の実家に、三カ月後の十一月中旬ごろ着いたとのことでした。彼と同じ列

車の一両後に乗っていた同級生の舎生B君は、ソ連空軍の戦闘機の機銃掃射により死亡したとのことでした。また牡丹江近くの一面坡から来ていた親友の舎生C君は、避難民でこった返す奉天駅で偶然にも両親と出会い、葫蘆島経由で無事日本に帰ることができたとのことでした。

人の生死は紙一重であり、人の命や運命は人間の知恵では測り知れないことを、私たちは身をもって体験したのでした。

八月二十五日ごろ、旅順第一小学校の校庭で、旅順中学校の解散式が行われ、これからも学業を続けていきたい生徒には、四年生一学期の学業終了証明書を、そのまま卒業を希望する生徒には卒業証明書を、三年生、二年生、一年生には、それぞれの学年の一学期学業終了証明書が渡されました。そのとき、高台にあった旅順第一小学校の校庭から見た旅順軍港には、日本の軍艦は一隻もいなかったことを覚えております。恐らく八月十五日ごろから八月二十三日ごろにかけて、日本本土の軍港、佐世保港あたりに帰ったのではない

かと、私は推測しております。

そのことは、富永孝子著の『大連・空白の六百日（改訂新版）』に「ちなみに、八月二十二日、大連の南西四十キロメートル地点の軍港旅順も、大連と同時に占領された。旅順地域ソ連軍司令官イワノフ中将一行は、三潤堡海軍飛行場に到着した。イワノフ中将は、出迎えた旅順方面海軍根拠地隊司令官小林謙五海軍中将に對して、まず一通の文書を差し出した。それは、無条件降伏文書であった。大連には平和進駐、旅順には武力進駐と、ソ連軍当局は明確に区別していたのである。」と記されているのを見て、私の経験からみても、降伏文書の手交時間は恐らく八月二十三日の午前九時ごろだったと考えられ、降伏文書の手交を受けた小林海軍中将は、ただちに旅順駐在陸軍部隊の指揮官と旅順市長とに連絡を取り、その日のうちに旅順港を後にしたと推測されるからです。旅順軍港の正式名称は、正面玄関に「日本海軍佐世保鎮守府旅順要塞司令部」と墨書してあったことを微かに覚えております。

八月二十五日ごろから八月三十一日ごろにかけて、

旅順駐留の陸軍部隊および憲兵隊の武装解除、日本警察の解体などが行われ、これに伴って中国人による略奪、暴動などが横行し、ソ連軍が出動して鎮圧するという事態もありました。

九月になるとすぐに、「新市街の日本人は全員、九月末日までに旧市街に移ること」というソ連軍による命令が出されました。この命令によつて、九月は新市街の日本人も旧市街の日本人も相当に混乱し、日本人同士の間でかなりの摩擦が生じました。

十月の一日か二日になりますと、ソ連軍の軍票が市中に回るようになりましたが、すぐに偽札も出て、その見分け方を中国人に教えてもらったことがありました。市中も少し落ち着きを取り戻し始めたころになると、旧市街にあった旅順市場の広場が格好の取引場所になりました。それまでは、中国人と日本人の間では、原則として本人同士の交渉による物々交換であり、ソ連軍と日本人の間、あるいは中国人との間でも同じであったと思いますが、原則として「ダワイ、ダワイ（よこせ、よこせ）」の連続でした。

しかも十月になると「旅順在住の日本人は全員、十月末日までに、大連に移動すること」という日本人に対する旅順強制退去命令がソ連軍によつて出され、旅順の日本人社会は中国人社会をも含めて大混乱となり、ほぼ完全に無秩序状態になりました。ソ連軍の通達によつて、早期に、多分十月十五日ごろまでにといいことでした。旅順・大連間の南の海岸線に沿つて走る旅大南路を通つて中国人の運転するトラックや馬車で大連に移動した人たちは、その多くが途中で盗難や略奪に遭つたということでした。

十月二十日ごろになると、この旅大南路の略奪、盗難もほぼ一段落して比較的安全になった、といううわさが立ちました。そこで十月二十五日ごろ、母と私の一家は他の二、三の家の方と共同して中国人の運転するトラックを雇い、大連に移りました。途中何事も無く、無事大連に到着し、満州電業大連支店の指示により、紀伊町にあった大連日日新聞社近くの満州電業社員寮に落ち着くことができました。やがて、その寮には満州電業旅順出張所の人たちが多く来るようになり、

互いに励まし合い協力し合って、大連での生活を送るようになりました。

私たちが大連に移住しました十月の下旬ごろ、あるいは十一月月上旬ごろには、大連の治安状態社会秩序もかなり落ち着いてきているように感じられました。

(二) 父の大連帰還

十一月三日(当時は明治節、現在は文化の日)、北満で現地召集されていた父が、突然私たちの住んでいる社員寮に帰って来ました。母と私はしばらくの間、呆然として立ちすくんでいました。父の話によりますと、大連への帰還の経緯は次のようでした。

昭和二十年四月上旬、「四十五歳以下の在満日本人の男性は、全員現地で応召せよ」との命令で、四十五歳の父は北安の北およそ百五十キロメートルの所にある孫呉(ソ満国境の黒河から南に約八十キロメートル、小興安嶺の麓にあり、対ソ第一次防衛線が引かれていた地)の部隊に入隊したそうです。関東軍の主力精鋭部隊は既に南方戦線や本土決戦に備えて、それぞれの地域に移動し、関東軍は最早蛻の殻で、父の所属する

部隊では、ほぼ四十歳から四十五歳ぐらいまでの民間人に近い兵隊ばかりで、入隊後は連日のように塹壕掘り、ときどき軍事訓練が行われる程度だったそうです。最も困ったことは軍隊生活の苦しさではなく、尾籠な話ですが、「早飯、早糞、早集合」であったと笑って話しておりました。八月九日の払暁、突如としてソ連軍戦闘機による爆撃および機銃掃射があり、対ソ戦が勃発したことが分かり、部隊はただちに孫呉市にある小興安嶺上の防衛陣地に移動し、対ソ戦に備えたということでした。このとき渡されたのは、三十八式小銃とその弾丸三発ぐらい(その中の一発は自決用)と、手榴弾二発。これを持ってソ連軍の戦車のキャタピラ目がけて飛び込めという指示で、失敗した場合には一発を投擲し、他の一発で自決せよとの指示であった、と父は言っていました。ソ連軍は、日本軍防衛線の正面である黒河方面からは進攻せず、平野続きの北満の東西両翼の土地から、ハルピンを目指して進攻して来たとのことでした。そのために、孫呉近辺に敷かれていた日本軍の第一次防衛線は背後を突かれる形となり、

何の武力衝突もないままに孤立化し、終戦の詔勅が放送されるまで、ただその日を過ごしていた、と父は言っておりました。八月十五日、終戦の詔勅が放送されると、ただちに孫呉第一線の守備部隊は部隊長令で「部隊長の責任において、原隊を現地解散する」という命令が出され、部隊は即刻解散。部隊長以下、部隊の責任者は各自自決したとのことでした。その後、新京にたどり着くまでの父の足取りを父の話からまとめてみますと、次のようでした。

八月十五日夕刻、部隊解散後、父は民間人の服装に着替えて、ただちに孫呉駅を出発。夜遅く北安駅に着。すぐに満州電業北安支店の社員寮に行き（幸いにもほとんどが単身赴任者であったとのこと）、即刻、全員避難準備。八月十六日早朝、ハルピン行きの避難列車に全員搭乗し、同日夕刻ハルピン市郊外に到着。松花江上の鉄橋がソ連空軍の爆撃によって破壊されていたため、同日夜、浅瀬を探して全員徒歩にて渡河。後で分かったことには、このとき既にハルピンはソ連軍によって占領されていて、徒歩による松花江の渡河は

幸運中の幸運であった、と父は言っておりました。八月十七日の午前、ハルピン・新京間の鉄道線路沿いを歩いていたところ、運良く避難列車（貨車）が通りかかり、それに飛び乗って、同日の午後遅く五時前に新京駅に到着。新京にある満州電業本社と連絡が取れ、北安支店の社員一同は、一団となって満州電業本社の社員寮に落ち着くことができたということでした。離れ離れにならなかつたことが幸いし、皆に勇気を与え、その後の生活に非常に役立ったということでした。その翌日、八月十八日にソ連軍が新京に進駐して来て、「この逃避行を振り返ると、全くの幸運の連続であった」と、父は術懐しておりました。父が新京で避難生活を続けておりましたころ、新京では「旅順、大連地区は、アメリカ海軍の艦砲射撃により全滅した」との情報が流れていたそうです。新京は、父にとり約四年ばかり赴任していた土地であり、勝手が分かっていたので、主に涉外や食料品の調達などを受け持っていたそうです。それでよく外出するようになり、外出したときには必ずといっていいほど新京駅近くに向

き、ソ連軍の動向やソ連軍占領下における新京駅を発着する列車や機関車の動きを見ていたそうです。その中に、満鉄（通称）の日本人機関士の方と仲良くなり、「機関車の炭車（機関車の後部の石炭の積みである所）の下に一人一人入れる空間があり、そこに忍び込めばひよっとすると大連に行けるかもしれない。私の運転する機関車の番号はこれこれで、運転士としての私の格好はこうこうしていて、多分十月の下旬ごろには再び新京駅に来ることになるだろう。もし十月の下旬ごろ、そのような機関車を見かけたなら、夜陰にまぎれてその機関車の炭車の下に潜り込み、大連行きを図って下さい。但し命の保証はありません」との情報を得たとのことでした。父は「旅順、大連にいる家族の安否を確かめてくる」と言つて、十月三十日の夜、手筈どおり言われた機関車の炭車の下に潜り込み、二日ほどかかって大連・砂河口駅に着いたそうです。その途中、何回かソ連軍兵士による検問があり、炭車の中の石炭を銃剣で突いて回られたときには、その銃剣の音が近づくと「もう駄目だ」と死を覚悟したそうです。

す。大連の砂河口駅に着いた父は、満鉄本社や残っている満州電業大連支店の人たちと連絡を取り、私たちが家族が紀伊町の満州電業の社員寮にいたことが分かり、十一月三日、無事大連に帰つて来て、家族との再会を果たしました。父は幸いにも引き揚げるまで、名称は変わりましたが、大連の満州電業に勤めておりました。

(三) 終戦後の大連の中等教育

旅順中学校の解散式で、第二学年第一学期の学業終了証書をもらった私は、十月下旬ごろ、大連に強制退去させられてから、十一月三日に大連に帰つて来た父の強い勧めで、十一月の比較的早い時期に大連二中の二学年に編入しました。それから一カ月後か十二月下旬の二学期が終わるころ、大連二中が中国政府に接収されて閉校になり、翌昭和二十一年一月からの第三学期には、大連一中に通学したと記憶しております。

昭和二十一年四月、大連の中学校は一つの名称「大連日僑中学校」の下にまとめられ、旧大連一中は「大連日僑中学一分校」と称され、授業はすべて午前と午後の二部授業となり、先生方は旧制旅順工大、旧制旅

順高校、旧制南満工専、旧制大連経専など、旧制専門
学校以上の先生方が講師になって来られていたように
思います。この大連日僑中学校は、各分校とも十二月
二十日に閉校されました。私はこのときの期末試験の
最後の日に、恐らく十一月の終わりごろか十二月の上
旬ごろであったかと思いますが、最後の試験を受けて
から急に発熱して肺炎となり、同じ方面から一緒に登
下校していた友人二人が、日僑中学の閉校後、大連日
僑中学校の在籍証明書か終了証明書と、成績通知表と
を届けに来てくれたことを覚えております。なぜこの
ような瑣末なことをよく覚えているのかといいますが、
この友人の中の一人の弟さんと日本に帰ってから親し
くなり、いろいろと話をしているうちに、大連朝日小
学校付近に住んでいて、私がこの弟さんのお兄さんと
一緒に大連二中、大連一中に通っていたことが分かっ
たからです。戦後三十余年ほど経ってからの奇遇でし
た。大連には、そのほか、大連三中、大連中学、大連
商業、大連実業などの男子校があり、女子校としては、
神明、弥生、芙蓉、羽衣、大連高女などがありました。

終戦後、これらの学校がどのような経緯をたどった
のか、当時男子中学校の、しかも旅順中学の二、三年
生でありました私にとっては分からないことでした。

(四) 引揚げ

昭和二十一年十二月三日に、引揚げ第一船である永
徳丸と辰春丸の二隻が大連港に入港し、満州の奥地か
ら避難して来た人、生活に困っている人、危篤状態の
病人をかかえている家族など、各一隻につき約三千人、
合わせて約六千人を乗せて、即日出港した。「体は痩せ
衰え、今にも死にそうな可哀相な人たちがばかりであっ
た」とのことです。確かに私の記憶では、十二月の初
旬ごろ、船名および隻数は不明でしたが、日本国籍の
船が大連港に入港し、慌ただしく出港して行ったとい
うわさを耳にしております。私の住んでおりました
満州電業の社員寮からも、一人の方が家族と共に第一
船で引き揚げられました。日本の船が来港し出港して
行ったというわさが流れますと、大連日日新聞社の
ある紀伊町から敷島広場付近一帯にかけて治安状態が
極度に悪化し、さらには中国政府による大連日日新聞

社の接收もあつて、この年の末日ごろ、これまで協力し合つて共同生活を送つてきておりました、満州電業旅順出張所の人たちも、結局は離散してしまいました。私たちの家族は、境池近くの満州電業の一軒家の社宅に引越しましたが、日本に引き揚げて来てから今日に至るまで、これらの人もしくは家族の方と再会できたのは、わずかに一、二人の人たちだけでした。「一度離散してしまえば、再び会えることは、まずほとんど無い」ことを、実際に体験した出来事の一つでした。

昭和二十一年十二月三十一日、日本の引揚げ第二船二隻が大連港に入港し、同日出港して行きますと、いよいよ大連地区の引揚げ事業が本格化してきました。帰国する地区の順序は、大体において、大連の東の地区から次第に西の地区へと移つていく方針が取られ、最初は寺兒溝地区から始まり、次に現在中山地区と言われる常盤橋方面へと進み、それから南の方向に当たる春日町、向陽台、青雲台、桃源台、平和台、老虎灘などという嶺前地区へと進み、再び常盤橋方面に戻つてから、西の方向、伏見町、聖徳街、大正通り、砂河

口方面へと進み、それから西崗街地区、再び旧浪速町付近の中山地区となつて、記録によれば昭和二十二年三月三十日に大連港を出港した恵山丸をもつて、大連地区の引揚げ事業は終了しました。

私たち一家は、二月三日、節分の日に、当時引揚者の収容所になつていた八坂町にある大連実業学校に集結しました。引揚げ時に持つていける荷物は、引揚げが始まつた当初よりも幾分緩和されて、一世帯当たり柳行李一個と手に持つてるものだけというようになっていました。集結場所までの荷物の運び方と費用は、各世帯負担となつていたように記憶しております。

旧大連実業に集結しますと、行李類は運動場に山積みされ、私たちは各班に分けられて、恐らくは着のみ着のまま、あるいは持つて来た毛布一枚に一家全員が包まつて、乗船する日本船が到着するまで、三日ほど収容所に宿泊していたように思います。三日目の朝、突如として「手荷物などを持つて、校舎内のソ連軍検問所に集合すること」という命令が通達され、全員行李などを持つて検問所前に集まりました。検問は、私

の記憶では次のようにして行われたと思います。

まず最初、ソ連軍兵士による第一次検問で、「そのまま通つてよろしい」組と「検査を必要とする」組とに分けられました。幸い私たちの家族は「そのまま通つてよろしい」と判定されて、検問を通過しました。「通つてよろしい」と判定された組は、ソ連軍兵士による厳しい監視下、ただちに校舎の外に待機している幌付きの軍用トラック（米軍貸与の軍用トラック）に、各グループごとに乗せられました。このとき、重い手荷物のトラックへの搬入は、武装解除された日本軍兵士たちであり、ソ連軍兵士の厳しい監視下では、ひと言も話せなかったこと、話せばその場で連帯責任として全員射殺されるということであつたと覚えております。一路、大連港第一埠頭に接岸している日本船の真下に連れて行かれてそのまま乗船し、行李などの大きい荷物は甲板上に野積みされ、私たちは船内の居住区域に連れて行かれました。船倉は最初からある本来の鉄製通路（小甲板）のほかに、大人一人が屈んで通れるぐらいの高さの木製の棚が数段にわたって設けられ

ており、軍用の毛布が敷かれていて、そこに手荷物類をやつと置くことができました。乗船後、すぐに日本の船員さんが「もうここは外国ではありません。日本です」と言った言葉が忘れられませんでした。一方、第一検問で「検査が必要である」と判定された組は、行李ごとソ連軍将校の前に立たされ、手にしている持ち物はもとより、行李などはほとんどのものを全部開けられて調べられ、目ぼしい物は全部没収されたとのことでした。女性は、カーテンで仕切られている別の部屋に連れて行かれ、女性将校によつて徹底的に調べられ、やはり目ぼしい物は全部没収されたそうです。

このようにして、私たちは昭和二十二年二月六日に大連港を出港した「信洋丸」に乗船しました。

夕日に映える大連港の長い防波堤を見たとき、私は「旅順よ、大連よ、ありがとう、さようなら」と、心の中で呟いていました。信用丸でも他船と同様に、水葬、大連で横暴を極めた人たちの吊るし上げ、盗難、嫌がらせなどがありました。

四 結び（引揚げてから）

昭和二十二年二月九日、佐世保港に入港、頭から白いDDTを全身にかけられて、海兵団宿舎に入居。諸手続き、調査、日用品や当座の生活費(私の記憶では、新円で一世帯につき五百円)等の支給があつてから、二月十二日午後の南風崎駅発の引揚着用特別列車に乗り、十三日の夜、故郷である滋賀県大津市石山鳥居川町の祖母の家に帰りました。大津市は幸いにも戦争中、海軍の魚雷工場になっていました東洋レーヨン石山工場に、二回ほどの爆撃があつたほかは、空襲はほとんど無く、町は昔のままでした。「お祖母ちゃん、ただいま。今、帰って来ました」これが私の第一声でした。しかし、祖母の声はありませんでした。ちょうど一年前、昭和二十一年二月十三日に祖母は他界していました(享年七十六歳、当時としては長寿の方でした)。奇しくも、祖母の一周忌の日の故郷帰りでありました。美しい祖国日本、心温まる祖国日本、祖母のいる憧れの祖国日本に帰って来て、心身共に大きな安らぎを感じたのでした。祖母は、若いころから信仰していた神前で礼拝している姿のまま亡くなっていたそうです。

綺麗で美しい死であつたと、親戚の者たちは話していました。長男である私の父一家三人は満州(大連)に、次男である叔父一家五人は広島(原爆に遭いましたが、幸運にも一家全員無事、叔父は原爆の影響により五十二歳で死亡)に、それ故に子供や孫に見送られることも無く、祖母は一人で旅立って行きました。戦争のために、どうすることもできない悲しい別れでした。

祖母の親戚と広島にいる叔父との間で連絡が取れたのは、祖母の死後およそ三カ月ばかりが経つてからのことでした。叔父一家五人が急ぎ、祖母の家に帰って来ました。それから約九カ月後に、私たち一家三人が大連から引き揚げて来ました。恐らく叔父と父の間で、家のことが話し合われたことだと思えます。父は生まれ故郷である滋賀を、特に私たちの本籍である近江商人の本場の地を、悲しい思い出ばかりに満ちた故郷としていたらしく、滋賀県の話や近江商人の話など決して私にはしてくれませんでした。渡りに舟とばかりに一切を叔父に譲り、私たち一家が外に出ることになりました。引き揚げて来ましたとき、既に父は

数え年四十七歳、昭和二十年代の定年は五十歳が普通でしたので、雇うような会社は一つもありませんでした。満鉄には、社員のための消費組合という組織があり、社員の衣と食の確保と安全性を保証しながら、市価よりも二、三割安い値段で社員に商品を提供していました。（現在の農業協同組合、生活協同組合の原形に相当すると私は考えています）。満州電業にも満鉄に倣って、このような消費組合があり、父はその消費組合の仕事に従事していました。その経験が買われて、福岡市と松山市の団体の相談役となり、昭和三十六年三月、松山で脳溢血で亡くなりました。満六十歳でした。私が学業を追え、研究生活に入ったばかりの時期でした。

母は、父が福岡で在職中、昭和二十八年十月に癌で亡くなりました。前にも述べましたように、私が大学三年生のときでした。私は昭和二十二年二月下旬、滋賀県立の旧制中学校に点入学の手続きをしました。三月中旬、父と共に呼び出しを受け、三年生に止め置かれることなく、四年生に進級することになりました。

父は喜びましたが、私は旅順、大連の中学二年生、三年生のときに十分な勉強をしていなかったもので、中学一年生からいきなり四年になるという感覚で、不安いっぱいでした。「落第したらみっともない」という気持ちで勉強しましたが、私の不安は見事に的中し、中学四年修了時で受験できませんでした旧制高校の入学試験に失敗し、昭和二十四年四月から発足しました新教育制度による新制高校二年生へと進みました。このころから文学にさらに傾倒し、「文学をするなら、東京に出なければ駄目だ」と言われて、無二の親友丁君と一緒に早稲田大学第一文学部フランス文学科を受験し合格して、同学科に入学しました。昭和二十六年四月のことでした。当時は、早稲田文学とフランス文学の最盛期でした。

母が亡くなりますと、さすがの私も自分の将来を真剣に考えるようになり、友人たちとも相談して、フランス文学研究者として生きることを決心して、大学院に進みました。学業を終え、研究生活に入りましたとき、父が亡くなりました。悲しみと共に大きな痛手と

なりましたが、何とか克服し、現在に至っております。

私は私の記憶を中心にして、その記憶を確かめながら、旅順からの引揚げを記してきましたが、その背景には、「二度と戦争をしてはならない」「あの戦争の悲惨な体験や記憶を風化させてはならない」という、「恒久平和」への切なる祈り、願いがありました。

次の自作の短歌をもって、本稿の「結び」にしたと思えます。

戦争の語り部多く老いたりき

戦よ風化するなど祈る

(平成二十年八月十五日詠む)

